

## 希望は神のことばから

ルカ 1:67~80

## 1. 希望と預言

アドベントの間、わたしたちは、四本のキャンドル（ろうそく）を灯して、クリスマスを待ちます。第一週のキャンドルは「預言のキャンドル」、第二週は「天使のキャンドル」、第三週は「羊飼いのキャンドル」、そして第四週は「ベツレヘムのキャンドル」と呼ばれます。それぞれのキャンドルには、テーマがあって、今日第一週の「預言のキャンドル」は「希望」です。なぜかと言いますとわたしたちの希望は、「預言」、つまり、神の言葉から来るからです。希望の光は、キャンドルにたとえるなら、神の言葉という蠟を燃やしながら輝やくのです。希望のないところで人は生きることができません。どんなに豊かなものを手に入れても、どんなに自由な時間があったとしても希望が無ければ、からだは生きていても、たましいは死んでしまった状態です。現代は豊かで自由な時代であるにもかかわらず、「何か楽しいことはないかな」「面白いことはないかな」と探し回っている人は山のようにいます。そういう人の心は実は砂漠の砂のように渴いています。光を放つどころか、水を吸い込んだらすぐに渴いてしまうのです。しかし、どんな逆境の中にあっても、たとえ明日も知れない生命の危険にさらされている場合でも、希望を持つ人の目は輝いています。希望はこれから先のことを見ることができ、希望があるからこそ、過去を余裕をもって見ることが出来、今やっていることに大きな意味と意義を見出すことが出来るのです。希望が無ければ、過去はとんでもないマイナス、負の遺産となり、後悔が湧き、今の時はそれを取り返すことに躍起になってしまうことになるでしょう。

わたしは、牧師と言う仕事柄召される時がまじかに迫っている方を訪ねたり、一緒に過ごすことが比較的ある方だと思います。そして多くの場合、御言葉を語り、祈りを終えたあと、その人の目に希望が輝くのを何度も見てきました。天の御国の希望を語った時に何ともいえない平安がその人の上にあることを目にしました。人間の言葉には、絶望を癒す力はありませんが、神の言葉にはその力があります。もし、人が希望を失くし、絶望の沼に沈んだままですとすれば、それは、神の言葉の光を見ていなくて、そのともしびが心の内に無いからではないかと思ったりします。

人は前に進んでゆくために自分の人生の支えとなるような言葉を求めています。もう40年も昔のことですが初めて留学した時、日本の景気が円高で良いこともあって多くの日本人が渡米して来ていました。日本の企業も進出していましたし、若者も語学留学ということで多くの日本人がいました。出会ったある青年はすし屋でアルバイトをしながら将来アメリカで大きな事業をしたいといういわゆるアメリカンドリームを描いていました。会う時にはいつも彼は本を持っていました。ほんのタイトルは「成り上がり」と言って、ミュージシャンの矢沢永吉さんの自叙伝でした。そして彼はしょっちゅう「おれはビッグになりたいんすよ」と言っていました。我々も「なれたら良いね」と言っていました。突然、彼の姿が消え、消息不明となりました。後々、風の便りに「日本に帰ったらしいよ」と聞きましたが詳細は分かりません。ただうまく行っていたら報告に来てくれたと思いますので恐らく夢破れる経験をしたのかなと思っています。後で思いましたのはあの「成り上がり」という本は彼にとっては人生のバイブルのような存在だったんだらうなということです。本の中の一つひとつのことばが彼の人生の励ましとなったことだと思っておりますがやはり人のことばには限りがあります。私も矢沢さんは、つまりエーちゃんですよ、嫌いな方ではないのですが本や人のことばはどんなに偉大な人が言っていたとしてもほんのしばらくの希望を与えても永遠の希望を与えることはできません。しかし神のことばは本当の希望を与えることが出来るのです。聖書はこのように言います。「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」ペテロ第二 1:19 御言葉に聞き、それを心に宿すなら、わたしたちの心から希望のともしびは消えることがないのです。

## 2. 希望と救い

神の民イスラエルは、紀元前586年に国を失い、ダビデの王朝は途絶えていました。それ以来、ユダヤの人々はバビロンやペルシャなどの大帝国内に支配され、キリストがお生まれになったときには、ローマ帝国の支配のもとにありました。そんな中で、ユダヤの人々は、神の救いを待ち望みました。しかし、その救いがどんなものかについて、意見はまちまちでした。神殿を取り仕切っていたサドカイ派は、神殿儀式の中に救いを見ようとしていました。サドカイ派は神殿があり、宗教的な儀式さえ出来ていればローマ総督やヘロデ王と妥協するのをなんとも思いませんでした。現代に例えれば教会堂があり、礼拝をはじめ様々な式典が行われていればこの世と妥協することは問題無いと考えたのです。パリサイ派は、そうした妥協を嫌い、ユダヤの伝統と律法を守ろうとしました。律法を守り行なうことが救いであると考えていたからです。熱心党というグループは、武力つまり力づくでユダヤの独立を勝ち取ろうとしました。もちろんそのために暴力や人に危害を与えるような過激な行為は正当化されるのです。

このように人々はそれぞれ、自分の考えで「救い」を定義し、自分の好む「救い主」を描きました。結局、神が約束された救い主、神の救いの御業を正しく理解していなかったのです。希望は神の言葉から生まれますが、その神の言葉を正しく理解していなければ、ひとりよがりの思い込みで終わります。「救い主」がどのようなお方で、その「救い」がどのようなものかを、正しく知ることがなければ、希望は確かなものとはなりません。

では、聖書が示す神の「救い」とはどんな救いなのでしょう。77節に「罪の赦しによる救い」という言葉があるように、ザカリヤは、それは「罪からの救い」とであると、聖霊によって預言しています。イスラエルの多くの人々は、ローマの支配から救われたいと切実に願っていました。しかし、罪に縛られたままであるなら、ローマの束縛から救われたとしても、また別の国に束縛されるようになるでしょう。ある人は貧困から、またある人は病気から、また、このトラブル、あの悩みから解放されたいと願います。経済活動が盛んになれば、貧困が解消され、医学の進歩によって病気が治ることもあるでしょう。しかし、罪から解放されないかぎり、たとえ目に見えるものから一時的に解放されたとしても、また別の苦しみや悩みに落ち込んでしまうのです。仕事のこと、それが終わったら家庭のこと、それが終わったら自分の身体のこと、次から次と問題は押し寄せてきます。ある問題が解決してもわたしたちの人生の根本的な解決にはならないのです。ですから聖書は「罪の解決なしには、人は本当の問題の解決はない」と、繰り返し教えています。

近年、「自分を愛する」、「自分を褒める」ということが推奨されています。自分の罪を嘆き悲しむなどというのは、精神衛生にきわめて悪いことであって、自分で自分を赦して、晴れ晴れとした気持ちになればいいのだと言われるようになりました。クリスチャンでさえ、それが「福音」であり、聖書の教えであるかのように考えるようになりました。しかし、聖書が教える「罪の赦し」は、そんな気休めのようなものではありません。ただひとり、罪を赦すことができるお方から、「わたしもあなたを定めない（罰しない）」ヨハネ8:11という権威ある言葉を聞くことだと教えています。もし、罪の赦しが、たんに「心を軽くする」だけのものなら、神の御子が人となって世に来られ、十字架でその生命を投げ出す、そこまでする必要はありませんでした。それこそ良いカウンセラーにかかればずいぶん心は軽くなります。聖書は救い主を「罪から救う者」マタイ1:21と呼び、救いのメッセージとは、「罪の赦しを得させる悔改め」ルカ24:47であると言っています。どんなものも、また、世界の誰ひとりとして、人を罪から救うことができるものはありません。ただひとり、人となられ、わたしたちの罪のすべてを背負ってくださった神の御子、イエス・キリストだけが、わたしたちに罪の赦しを与えることができます。人は、罪の解決を得てはじめて、この世で力強く生きることができ、世を去ったのちも、永遠の幸いに入ることができるのです。この救い主を知り、この救いを受け取るとき、わたしたちは本物の希望を持つことができるのです。

### 3. 希望と主に仕えること

そして、罪の赦しは、わたしたちを「きよく正しい」生活と、神への「奉仕」へと導きます。74～75節に「われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。」とある通りです。キリストの救いは「罪からの救い」です。しかし、それは同時に「きよさ」と「正しさ」、神への「奉仕」への救いです。聖書は「何から救われる」かだけでなく、「何に向かって救われる」か、「何のために救われる」のかについても教えています。神が、人の罪を赦してくださるとするのは、人が罪の中に生き続けるのを、許可するというものではありません。日曜日、礼拝して神の前に罪赦され、人生がリセットされてまたしばらくは自分の好きなように生きる、そういったことはありません。新しい新改訳聖書（2017）では、「きよく正しく」を「敬虔に、正しく」と訳しています。「敬虔とは、神に対するきっぱりとした態度である」と言った人がいますが、その通りだと思います。聖書の聖さとは「切る」というニュアンスが含まれています。まことの信仰者には、光と闇がまじりあったようなあいまいな場所などありません。光のあるところに闇はなく、闇のあるところに光はないからです。罪の赦しと救いに関してはまあどっちもぼちぼちと言ってどっちつかずの生き方などないのです。

もちろん、この地上で、どんな罪も犯すことがなく、完全に正しい生活ができる人は誰ひとりとしていません。敬虔なクリスチャンもまた罪を犯すことがあります。しかし、まことの信仰者は罪の中に沈みこむことはありません。悔い改め、さらに神に信頼して、きよさと正しさを目指して、主に仕えてゆきます。なぜなら、今は、不完全であっても、やがて時至って、神がわたしたちを完全な者にしてくださるという希望があるからです。旧約時代の人々が救い主の到来を待ち望んだように、新約時代のわたしたちも、キリストの再臨を待ち望みます。イエス・キリストは、二千年前に始めてくださった救いを再臨によって完成させてくださいます。この希望から「聖なる敬虔な生き方」が生まれるのです。どんなに失敗しても、主を見上げて、主に仕えて歩もうとするのです。この希望がある限り、過去も、現在も意味あるものとなり、無駄なこと、損なことは一つも無いのです。わたしたちは御言葉によって希望を握りしめているでしょうか。この希望に導かれてきよさを目指し、つまりきっぱりと悔い改めるべきことは悔い改め、主の栄光を目指して歩んでいるでしょうか。聖書は、わたしたちにそう、問いかけています。預言のキャンドルを灯すとき、この呼びかけに答え、この週を過ごしたいと願います。